

電波伝搬：物理現象とモデリング

～先達の足跡をたどる～

唐沢好男

本レポートは、このシリーズの他のレポートのような書き下ろし記事ではなく、電子情報通信学会の会誌特集号に掲載された筆者の解説記事にリンクを張る形としている。この記事は、無償公開に指定されているので、会員外の人でも自由にダウンロードが可能である。

出典：電子情報通信学会、会誌：平成 28 年 8 月 (vol. 99, no. 8)、小特集 アンテナ・伝搬の研究開発のこれまでの 50 年とこれからの 50 年、pp.792-798. より

概要：

自然現象の解明に奮闘し、通信システム設計に有用な電波伝搬モデル構築や研究指針を示した先人たちの足跡を訪ねてみたい。ここに取り上げる例は、いずれも、我が国の先達はその構築に主導的役割を担い、かつ、今日の無線通信の基礎となっている伝搬研究とその結晶である伝搬モデルである。具体的には、移動伝搬理論を支える確率分布：仲上 n 分布（今日の仲上・ライス分布）と仲上 m 分布を生み出した仲上稔氏の研究、移動通信伝搬の概念構築と回線設計手法を打ち立てた奥村善久氏の研究開発、広帯域移動通信時代を予測してアンテナ (A)・伝搬 (P)・システム (S) の融合研究 (A・P・S 三位一体研究) を提唱した池上文夫氏の思想、そしてもう一つの無線通信の重要課題、降雨減衰のモデル化に取り組んだ森田和夫氏の研究開発を取り上げる。

リンク先：http://www.journal.ieice.org/bin/pdf_link.php?fname=k99_8_792&lang=J&year=2016